

## アンケートによる湯川の釣魚実態調査(2004 年度)

独立行政法人水産総合研究センター

中央水産研究所内水面研究部

上席研究官

北村 章二

### 1. 目的

内水面冷水域における遊漁資源管理技術の開発に資する知見を得るため、湯川において釣魚者へのアンケート調査を行い、キャッチアンドリリース(C&R)制となって3年目の釣魚実態を把握した。

### 2. 調査場所

調査対象の湯川は日光国立公園内に位置しており、湯の湖から流出し、戦場ヶ原湿原を通り、中禅寺湖へ注ぐ全長約 11.2km の一級河川である。元来、湯の湖、湯川、中禅寺湖等の奥日光水域には魚類が生息していなかったといわれているが、1902 年にアメリカから導入したカワマスが放流されて以来、湯川は我が国でも珍しくカワマスの釣れる川として人気を博している。釣魚期間は5月1日～9月30日までである。湯滝下から竜頭の滝上流部までが釣魚区間であるが、途中戦場ヶ原湿原内の一部は禁漁区間となっている。釣魚対象魚種はカワマス、ニジマス、ヒメマス、ホンマスである。このうちカワマスは天然繁殖魚の他、成魚放流によるものであるが、それ以外の魚種は湯の湖から落下してくるものである。2001 年の調査結果及び釣魚者からの要望を踏まえ、2002 年から全域が C&R 釣り場となっている。

### 3. 調査方法

釣魚期間開始前の資源調査結果及び釣り人の要望を踏まえ、本年は放流を全く行わなかった。

調査は 2003 年 5 月 1 日から 9 月 30 日までの釣魚期間中に行った。釣魚者(釣り券購入者)全員にアンケート用紙を配布して記入を依頼し、3ヶ所の釣り券売場(湯の湖釣り事務所、湯滝レストハウス、赤沼茶屋)もしくは釣り場に設置した回収箱にて回収した。釣魚方法(餌釣り、ルアー釣り、フライ釣り)、釣獲魚種、釣獲尾数、釣魚場所、釣果満足度等のデータを解析に供した。

### 4. 調査結果

釣魚者 4,408 名中、アンケート回答数は 1,130 あり、回答率は 25.6%であった。回答者の釣り方別の割合はフライ釣りが圧倒的に多く 84.6%(876)、次いでルアー釣りが 13.7%(142)、餌釣りが 1.7%(18)の順であった(図 1)。

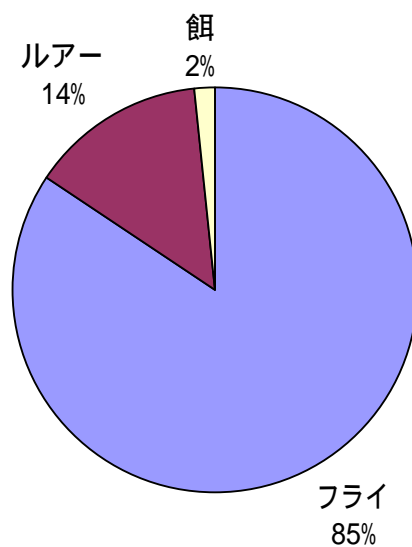


図1．釣り方別回答者割合

月毎の回答数を図2に示した。5月は回答が最も多く335であったが、6月には231、7月は165、8月、9月はそれぞれ101、44と減少した。

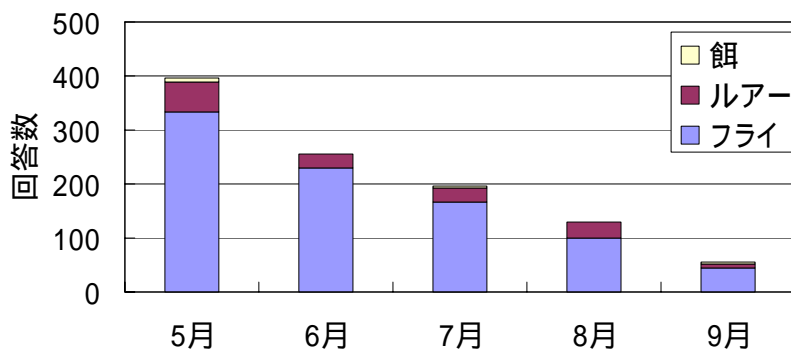


図2．月毎の釣り方別回答数

全釣魚区間別に回答数を示したのが図3である。昨年までは中流の5、6、7区が多かったが、今年度は上流域の2区が最も多く、3区、1区と続いた。

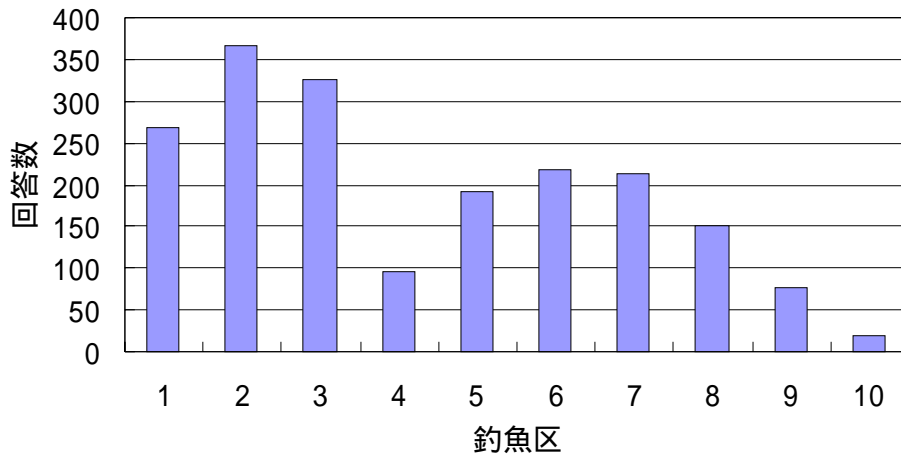


図3 . 釣魚区毎の回答数

1回の釣魚時間の平均を釣り方別に示したのが図4である。全体の平均は7.1時間であったが、フライ釣りが最も長く7.2時間、次いでルアー釣りが6.5時間、餌釣りは6.2時間で最も短かった。フライ釣りとルアー釣り、及びフライ釣りと餌釣りとの間には有意差がみられた。

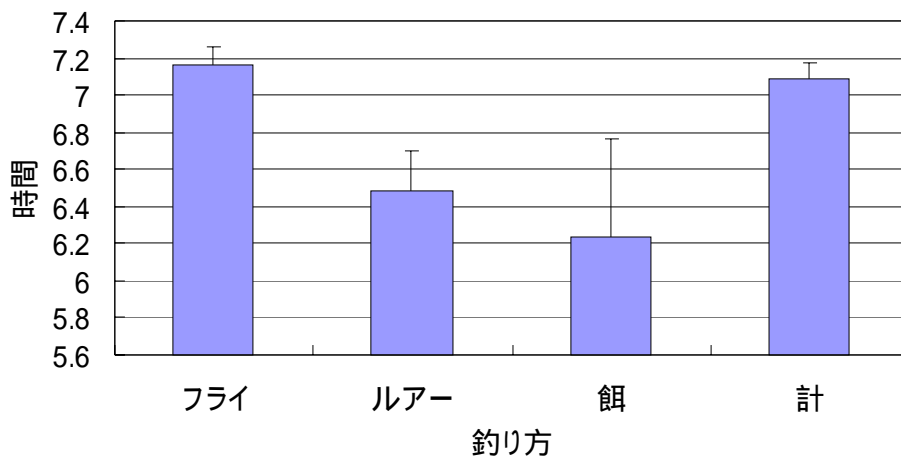


図4 . 釣り方毎の平均釣魚時間

図5に月毎のカワマスの釣獲率(1人1時間当たりの釣獲尾数)を釣り方別に示した。期間中を通した釣獲率は、フライ釣りが0.94、ルアー釣りが0.97、餌釣りが2.5で、餌釣りが最も高かった。フライ釣りでは5月に1.2と釣獲率が最も高かったが、その後徐々に減少した。

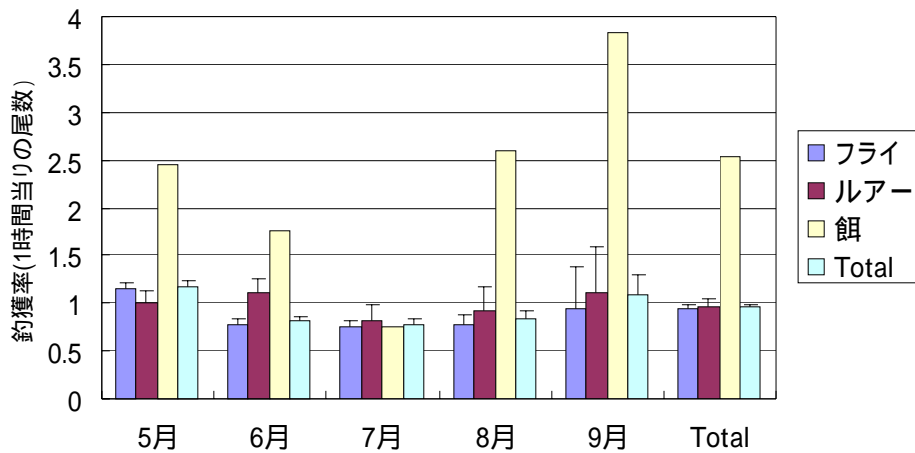


図5．月毎の平均釣獲率

図6に釣果と満足度を示した。「不満」を除く「満足」、「ほぼ満足」、「やや不満」の合計割合は釣果4尾以上でほぼ80%以上に達していた。

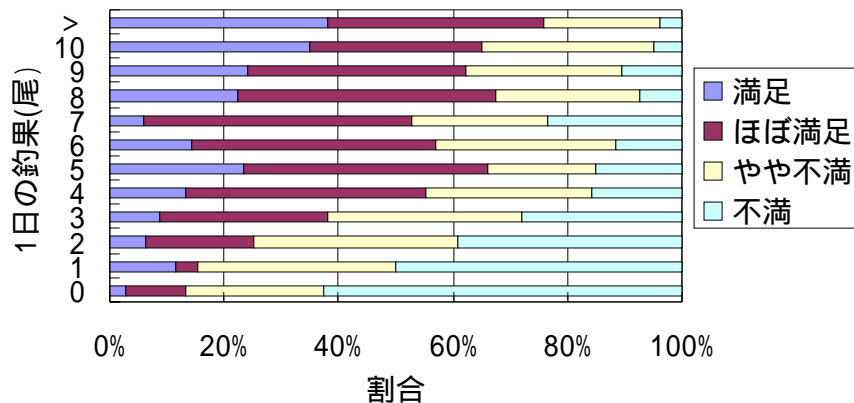


図6．釣果と満足度

### 5．考察

今年度の調査では、これまで同様、回答数は5月が最も多く、その後しだいに減少していったが、回答率は25.6%とこれまでで最も高く、信頼性の高い調査結果が得られたものと思われる。今後さらにシーズンを通してコンスタントな回答を得るための方策が必要と考える。

アンケート回答者のうち、釣り方別ではこれまで同様フライ釣りが圧倒的に多く84.6%を占めた。一方餌釣りは1.7%とこれまでよりさらに減少した。C&R制釣り場の特徴を表しているものと思われる。

釣魚区間別にみると、上流域の1, 2, 3区が多く利用されていた。2002年度のC&R制設定以降は、上流の渓流域の利用者が増加する傾向にあったが、今年度はさらに上流域利用者の割合が増加していた。これまでフライ釣魚者は、かつてフライ釣り専用区間があった戦場ヶ原湿原内の中流域を主に利用していたが、C&R制設定に伴って主に上流域を利用していた餌釣魚者の数が顕著に減少するにつれ、上流域の1, 2, 3区を多く利用するようになってきたものと思われる。あるいは、放流がなくなり中流域の魚影が薄くなったため、魚の豊富な上流域に釣魚範囲を広げたのかもしれない。

カワマスの1時間当りの釣獲率は、平均が約1尾で昨年を下回っていた。今年は成魚放流を行わなかったため、中下流域での釣果が上がらなかったことが原因と思われる。しかしながら、釣果満足度の調査結果によると、湯川の釣り人の80%以上は1日約4尾(1時間当たり約0.56尾)以上の釣果でおおむね満足していることから、今年度の平均釣果でも十分なものであると考えられる。また、別途行った資源量調査の結果から、放流を全く行わなくてもC&Rの定着及び天然繁殖により資源が豊富に維持されていることが明らかとなった。